

「見る、触れる、感じる」こと

から始まる研究と教育

中野 桂（経済学部助教授）

環境教育湖沼実習センターを備える教育学部とは比べるべくもありませんが、経済学部でもその地の利を生かして、琵琶湖に関する研究や教育が行われてきています。

昨年以來、一〜二回生の教養科目となる全学共通教養科目が導入され、そのなかで少なからぬ教員が、切り口こそ異なれ、環境問題を題材として取り上げてきました。私自身、「人間と社会」という授業の中で、琵琶湖の環境問題、特に水上バイクや釣りという琵琶湖にまつわるレジャーの問題を取り上げました。

環境問題ほど「現場」が必要なものはありません。琵琶湖では二〇〇六年四月から、環境対応型でない従来型二サイクル・エンジン・ボートの使用が禁止されます。この規制が行われることになったのは、水上バイクの騒音と排気ガスに悩まされてきた住民グループと一緒におこなった、誰でも簡単にできる実験から始まりです。五〇CCのいわゆる原付バイクから排気ガスを収集して、水に溶かしてその水の汚れを測ってみたのです。その結果、水の汚れを示すCOD（化学的酸素要求量）などが極めて高い値で検出されました。これに驚きその後、海外の文献を調査すると、一九九〇年代半ば頃からレジャー用ボートから湖に排出される排気ガスの影響を指摘する論文が多数見つかり、海外で

は既にそうしたエンジンの使用禁止等の措置が取られていることがわかってきました。一方、水質に関するより専門的な調査も繰り返しました。そして、これらの調査の結果を粘り強く国際会議などで発表し、行政に働きかけることによつて、琵琶湖でも遅ればせながら、規制がかかることになったわけです。これは琵琶湖の湖岸で実際に排気ガス臭にふれ、まさに現場の中から生まれてきた一つの成果だったといえるでしょう。

教育の場面でも、「現場」は重要です。例えば「人間と社会」の授業の中では、琵琶湖から回収されたプラスチック・ワーム（プラスチック製疑似餌）を見せました。プラスチック・ワームは、すでに劣化が始まりドロドロに溶けていましたが、それが飲み水である琵琶湖に多量に沈んでいるという事実は、多くの学生にとつて衝撃的なものであったようです。実は、自分の飲んでいる水がどこから来ているのか知っている人は多くありません。しかしながら滋賀大学の学生は、寮や下宿の窓から、大学の教室の窓から、そして通学途中の電車の窓から、琵琶湖や琵琶湖に流れ込む川をほとんど毎日目にしています。それは、自分の飲んでいる水を毎日目にしていくと同じことです。東京や大阪などの都会では、なかなかありえない事です。そしてそのことは、きっかけさえあれば、滋賀大生は（敏感に問題を感じることができるということ）を意味しています。

環境問題の多くは、物事の関係性に対する認識が希薄になったところから生じています。自分の着る物、食べる物、そして住む家は、一体どんな素材でできているのか、誰が作っている

のか。そして、それらの物は、一つの役割を終えるところにいつて、何に姿を変えるのか。逆にいうと、こうした関係性が認識できれば、環境問題はほとんど解決したことになるという人さえいます。

経済学では、関係性が見失われて、外部の関係ない問題として取り扱われていた事柄を、自分あるいは企業の内部の問題として捉えなおすことを「内部化」と呼びます。意識としての「内部化」は、それ程難しいことではありません。スーパーに並んでいる滋賀県産のお米は、どんな水、肥料、農薬を使って育てられているのでしょうか。そしてその後、それらの水、肥料、農薬はどこへいくのでしょうか。

琵琶湖は我々のすぐ近くに、スーパーの中にもあって、いろいろと問いかけてくれているようです。

